歩いて発見。津の魅力

192 歴史散歩

寺町百八灯（てらまちひゃくはっとう）

８月15日頃を中心に行われるお盆は、祖先をまつる日本の夏の行事です。市内各地でもかんこ踊りなどが行われるこの時期、かつて津城下では「寺町百八灯」という盆行事がありました。寺町百八灯は、大坂冬の陣と夏の陣で戦没した藤堂藩士をしのび、旧盆の７月15日の夕べに行われていたものです。

初代津藩主である藤堂高虎は、現在の愛媛県今治市から、慶長13(1608)年９月に伊賀上野に、翌10月に津に入城しました。その後、慶長19(1614)年に大坂冬の陣に、そして翌年の元和（げんな）元年に高虎の旧主である豊臣氏が滅亡した大坂夏の陣に参戦しています。

夏の陣では、現在の大阪府八尾市にあたる場所で、豊臣方の長宗我部盛親（ちょうそかべもりちか）、木村重成の部隊と交戦しました。「八尾（やお）・若江（わかえ）の戦い」と呼ばれるこの戦いは両軍で多くの死傷者を出し、後に八尾にある常光寺（じょうこう）に藤堂家家臣七十一士の墓と位牌がまつられました。

ちなみに、これら家臣の菩提を弔うため、高虎は寛永５(1628)年に京都市にある南禅寺の三門を再建しています。この三門は、後に歌舞伎の演目「楼門五三桐（さんもんごさんのきり）」の中で、石川五右衛門（ごえもん）が楼上から満開の桜を見て「絶景かな、絶景かな」というせりふを言ったことで有名になりました。

さて当時、津城下町の形成に当たり、城下東側の防御として、そして漁業・商業の発展のために堀川が開削されました。極楽橋から入江町堀留まで通じていた堀川の西側には商人が集まり、東側には寺院が建ち並んでいました。この川沿いの東側に植わっていた柳に、大坂冬の陣・夏の陣の戦没者供養のため108個の高張（たかはり）ちょうちんがともされたことが「寺町百八灯」の始まりです。

寺町百八灯は、第二次世界大戦中の灯火規制により廃止されるまで、この地域のお盆の風物詩として行われていました。堀川は昭和39年に埋め立てられ、現在は岩田川沿いの北側に架かる極楽橋付近にわずかに昔の面影を残しています。寺町百八灯も忘れられたものとなり、極楽橋中継ポンプ場入口に設置した石碑にその由来が記されるのみとなっています。

寺町百八灯の石碑

極楽橋と堀川の名残